（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名：　横田　太郎

横田太郎氏の論文（第1巻論文本体146頁、第2巻註・書誌110頁）は、レオン・バッティスタ・アルベルティ（1404年生-1472年歿）の作品『文芸の利益と不利益』（以下『文芸』と略記）の解釈に関して、明確なひとつの提案を示した意欲的な試みである。この提案とは、先行世代の市民的人文主義者（とりわけレオナルド・ブルーニ）らの学問観・教育論に対する批判や揶揄を、『文芸』に一貫して読みとってゆこうとするものである。序論は、『文芸』の研究史を跡づけている。『文芸』の中に作者の苦学した経験や禁欲的学問観を読みとる傾向は1990年代末から弱まり、作品の執筆年代が見直されるとともに、前世代人文主義者らに対する作者の反感が捉えられ始めた。この変化に沿う形で、論文第1から5章は『文芸』の献辞と序文、および快楽、富、社会的名誉をめぐる各章を精緻に読み進めながら、先行する人文主義者らによる文献との幅広い比較を通じて、『文芸』の特徴を浮き彫りにし、またアルベルティのその他作品（『食間対話集』『家族論』『トスカーナ語文法』等）との関係を明らかにしている。『文芸』では、無知と批判される不名誉に怯えて禁欲的に学ばざるをえない文人が、読書に節度なく執着し、家計収支さえ顧みずに学識を目指すが、社会的名誉の獲得には至らず、むしろ軽蔑の対象となる。学問のもたらすこの「不利益」を重点的に描きだし、研究に励む文人の哀れな暮らしを明かした点にこそ、『文芸』の真新しさがあったと、横田氏は着実で細かな比較検討に基づき主張している。『文芸』末尾では、擬人化された「書物」が社会から隔絶された学識を称揚しているが、横田氏は、結論において、この称揚が見せかけにすぎないと論じ、アルベルティが読書による学識を絶対視せず、経験による実践的な知で補完する必要性を認識していたとしている。この認識は、読書に立脚した学識を重視し、それによる観想的生と行動的生の融合を理想としていた市民的人文主義に対する批判となる。

ただ、アルベルティ『文芸』が批判・揶揄の対象にしたと思しき人文主義者らの先行著作を解明してゆく場合、外形の類似により鋭く注意し、「ほのめかされた引用」や「偽装された再利用」などを明してゆく必要があろう。外形の類似が明確でないと、何を批判・揶揄しようとしているのか、アルベルティの意図が伝わりにくくなってしまうからである。しかし、横田氏が（時に手稿本を利用してまで）広く渉猟した諸文献は、アルベルティが組み込まれていた文化的コンテクストおよびそこで論じられていた問題を明かす上ではきわめて有益であり、その貢献は大きい。また、研究文献を多く参照した本論文を起点として、横田氏の研究が今後さらに発展するであろうことにも、大いに期待が寄せられる。

よって、審査委員会は横田論文が博士（文学）の学位に十分値するとの結論に達した。